

明日はいいことがある

八十二歳で逝った義母の口癖は
明日はいいことがある、だった

透析で週の半分は入院
甘いものには目がないのに
糖分、カリウム、カルシウムの
厳しい制限

六十キロ近くあった体重は
三十キロを切る有様で

それでも、娘の押す車椅子で
食事に、ショッピングに
勇んで出かけていった

いささか、我が儘な気はあるが

負けず嫌いで、他にふるまうことが
何より好きで

数年前までは
ロシアやポーランドや、中国にまで
絵筆をもって
ひよいと
一人で出かけていった

七十半ばでパソコンに出会い
幾度も周囲の手を煩わせながら
牛乳瓶の蓋みたいな眼鏡に
天眼鏡を持ち出し
ちゃんとメールの交換をしていた

人の出来ることは、自分も出来る

という無茶な言いぐさも
いつか無茶でなくなり
暗算は計算機より早く
小説を書いて一等賞をもらったり
エッセイで賞金を稼いだりした

今にも笑い出しそうに
生き生きとスケッチされている

死の床でも
明日はいいことあるんやろ
と呼びかけると
意識のない筈の手や足が
小刻みに震えた

義母が逝って四年
明日はきつといいことがある
とでも言わないと気が詰まりそうな
空気が漂っている

今度こそエッセイで一等賞を取る
と準備していたノートに
病室の仲間たちが

少年A

人が恋しいと思いはじめた頃
少年は厳しい掟のなかにあった

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少女はバスガイドをしながら
高校に通っていた
少年はときどき少女のバスに
乗り合わせた

少女のはにかんだ笑顔が
見たくて
少女のはずんだ
声が聞きたくて

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少年には未来への扉が開かれて
いないとしか思えなかった

少年は町役場の支所で
連絡係をしていた
殆ど一日口をきかないこともあった
少年への掟は物心ついたときから
課せられていた

島を出てはいけない
街を見てはいけない
長男なのだから

少女のはにかんだ笑顔が
見たくて
少女のはずんだ
声が聞きたくて

一時間の時間をやりくりして
少女のバスに乗った

少女が街の専門学校に行く
ということは噂で知れた
バスの乗客のみんなが
少女のファンだった

島を出てはいけない
街を見てはいけない
長男なのだから

少女の卒業式が近づいた朝
少年はある行動に出た
細い切符に

かすれた鉛筆の字で
ありがとう
と書いて

バスを降りるとき
少女の目に触れる近さで
切符を渡した

島を出てはいけない
街を見てはいけない

少年は後も見ずに
支所までの八百メートルの砂利道を
全速力で走った

いのち

いのちあるということは
なんだろう
生きているということは
なんだろう

いのちあるということや
生きているということは
きつと

走ったり転んだり
泣いたり笑いころげたり
すねたり恨んだり
することなのだろう

無邪気に遊び
ときにはののしりあい
ときには激しく好きになり

空っぽの頭で
眺めていたりする

父がいて母がいて
やがて
父も老い母も老い
自分も父や母が逝った
歳になつていたりする
フト気付いたりする

これが
いのちを生きている
ことなんだろうか
生きているから
いのちがある
のなんだろうか

いのちあるということが
なんだかよくわからない
生きているということも

次々と子供を生みおとす

陣取り合戦に夢中になり
相手の首をあげることに
夢中になり

返り討ちに逢い
血まみれになつたり
しようとも

それがいのちを
生きている
ことなのだろう

静かな海に向かい
赤い夕日に胸を染めたり
野原に寝転がつたり
流れる雲をただぼんやり

なんだかよくわからない

でも多分
走ったり転んだり
泣いたり笑いころげたり
すねたり恨んだり
空っぽの頭で
ぼんやり海を眺めて
いたり
することなんだろう

内科医院

かかりつけの内科医院は
地域の老人たちの
駆け込み寺

清潔で感じのよい窓口
少々気難しいが気さくな医師

いつも新しい花で迎え
さりげないクラシックが流れる

テレビやカセットなど
質素なものだけど
老人達の話の輪には
さわりはない

けばけばしいものなど

なにもないが
駆け込み寺には
それがふさわしい

ときどき窓口からも
話に相づちをうち
穏やかな笑顔が覗く

かかりつけの内科医院は
地域の老人たちの
駆け込み寺だから

あまり混み合うこともない
恰好の待合室が
ゆつくりと時間を
刻んでくれる

詩人

おじちゃんは詩人かい
子供がいう

そうだと
よくわかったな

おじちゃんは
大人臭くなくてさ
説教もしないし
パリッともしてやしないし
小遣いもくれない

いつまで経っても
飯粒をボロボロこぼすしな
説教なんて俺にはできやしない
ガラじゃないし

詩人で子供みたいな人のこと
みんなが変わった人だと
おじちゃんのこというよ

ちつとも大人にならないよな
第一高所恐怖症だし
勿論金もないし
オンナにはもてないし
折り紙つきの変人だよな

それでやっぱり
おじちゃんは詩人かい
なんだかみすぼらしいからと
みんながいうよ
それに
結構トシなんだろ

九月の雨

明けきらぬうちから雨
まだ紅葉には早いから
雨の音も静かだ

今日を越すか

といわれたあなたの耳には
いったい雨の音が
届いているだろうか
ジュージューと鳴る
人工呼吸器の音が
雨の音を遮っている
のかもしれない

天から下に降る雨を
見たことがある
確か四時間に及ぶ

手術中のときだった

家々の屋根に

雨がこぼれ落ち

一つの屋根の下にいる

自分の横たわる姿が

見えていた

今あなたは

峰にかかる雲の上から

あなたの足を撫でさする

私たちの姿が見えている

だろうか

必死にあなたの耳に

伝えようとする声々が

届いているだろうか

挽歌

一人一人を丁寧に見送ってきた
あなたが
今度は見送られようとしている

ものには順序があるとはいえ
やはり悲しい

殊更丁寧に見送ってきた
あなただから
余計に悲しい

向こう岸からは
あなたに見送られた幾人もが
あなたが着くのを
今か今かと待っている
に違いない

これは悲しむべきことではない
と頭では考えても
私たちはやはり悲しい

別れはどうであれ悲しい
どうでなくとも悲しい

せめてあなたが
別れた後出会うことの喜びの
大きさを思い信じ
悲しい別れを果たそう

コスモスのうた

美術館を
素足で歩くひとよ
青磁のタイルの上を
素足で歩くひとよ

やわらかでいて
たおやかでいて
意志的でいて
とてつもなく強い風にも
とてつもなく強い雨にも
さりげなく
そよぐひとよ

明日はないと
宣告された日から
まだ十月

奇跡のごとく立ち上がり
スケッチブックを抱き
さりげなく
歩くひとよ

解き放つ

人という頸木を解き放たれ
旅に出る

間違いない

元来た道をたどり

元から住み慣わしたところに
戻るのだと思う

しかし来るときと同じく

戻るときは垣根はさらに高く
険しい

樂觀過ぎるのかもしれない

夢みたいな話なのかもしれない

間違いない戻る道があり

もう願ひ下げだ

この人という頸木を続ける

ことの方が理不尽だ

人というやつは

悪辣千万なことを考え

平気の平左で

とんでもないことを

やらかしてしまう

そのくせ

どう頑張っても

その域から抜け出せない

と見える

勿論頑張りが足りないのだ

とはよくよく思う

若いうちにも

いろんなことをやらかして

住み慣わしたところに
戻るなんていうのは

ナンセンス

の一言で片付けられて

しまうのかもしれない

解き放たれるのではなく

むしろ絶対無間の無に帰して

しまうのかもしれない

そうであるかもしれないと

長い間信じてきた

しかしそんな無体な話は

今はごめん

しまうのだが

そうでなくとも

やがて老いというやつが来る

また誰彼となく責めつけ

さんざんに傷めつける

業病というやつもある

こういうわけだ

いやこういうわけではかないから

人という頸木を解き放たれ

旅に出る

という発想も

許されてもよいのではないか

そう信じきって

いっそ騙されたって

平気の平左のままで

悪辣千萬なことをやっている
こととたいして変わりはない

こういうわけだ

間違いなく

元来た道をたどり

元から住み慣わしたところに
戻るのだと思いたい

罰が当たったって

五十歩百歩

大同小異

目糞鼻糞を笑う

の類いではないか

美しいうた

美しい夢をみた

明け方のまどろみであった

しかし、なんの夢だったか

どんな美しい夢だったか

青い色であったか

白い色であったか

光に満たされていたか

何に感じたのだったか

歌だったか、言葉だったか

山の形だったか、水の色だったか

しかし、実に美しい夢だった

美しい

とはげしく思ったところで

目が醒めてしまった

今も胸の動悸激しく

美しい夢をみた

という思いは去らない

もつとも、とうから

夢に理屈など

ないのかもしれない

よくよく考えたりしたら

夢が夢でなくなる

のかもしれない

名人

毎朝一人の男によって
駅のゴミ箱の清掃がなされる

容器のフタを開け
ビニールの袋を取り出す

袋の中身に手を入れ分別する

分別したゴミを
中途まで入れた別の袋に
それぞれ入れ込む

空き缶
ペットボトル
週刊誌
食べ物の殻

一杯になった袋の口を
ぎゅうつと結ぶ

新しい袋一枚を
空になった容器に被せ
丁寧に四つに折りたたんだ
新聞紙を容器の底に沈める

真新しくなった容器を傾け
四方から確かめ頷く

雑巾を取り出し
容器をキュルキュルと拭きあげる

男がこの間に費やす時間は
ほんの三分

黒い野球帽をあみだに被った
男は実に手際よく
その場に新しいゴミ箱を
仕立てあげる

三分の後には
ちゃんと次の仕立てにかかる
鼻歌を歌いながら

黒い野球帽をあみだに被った
男はいつも
実に機嫌がよい

同じ時刻に
同じフォームに降りる
ことになって一年

男は傍のゴミ箱を
次々に作り替えていく

ホームが込んでいようと
若い女が群れて騒ごうと
ひどい雨が降ろうと

黒い野球帽をあみだに被った
男はいつも
鼻歌を歌いながら

三分という実に正確なタイムで
次々に
新しいゴミ箱を仕立て
生み出していく

さはさりながら

ニュースを見ても
新聞を読んでも

有効求人倍率五割未満などという
記事が踊る

そのくせ、疑獄、汚職、天下り
などはとんと無くならない

六十歳定年者は溢れるものの
年金は出ないから

こちらの方にはわけのわからない
臨時ポストをこしらえたりする

となると

肝心の就職年齢の若者に割く

ポストがない

もっとも、就労に耐えうる
堅牢、堅固な職場はどんどん
目減りしていく

若者たちは結婚もできない
子供も生まれない

定年を過ぎた親の
わずかな稼ぎで食っていく

子供が少ないから

親も子も我が儘で、甘ったれで
互いに我慢ができない

変な事件が増える

ささいなことで殺し合う
マスコミが芸能番組まがいの
ニュースに仕立て上げる

もうなにが最初で

なにが因業、因果で

なにがどのように捻れて
どうなったのか

その渦中にいて

その空気を吸っていてさえ

説明に窮してしまう

正しいとか、正しくないとか

そんな話はどうにどこかへ

飛んでいってしまった

さはさりながら

宇宙船地球号の上に

悲しい目をした人間という

種のものたちがしがみつき

土地の上を睨めあげながら
ズルズルと時を過ごしている

ありがとう

やさしくしてくれてありがとう
助けてくれてありがとう
怒ってくれてありがとう
絶交だといってくれてありがとう
口惜しかったこと
身も世もあらぬほどに嘆いたこと
心底から怒り狂ったこと
勘違いが発端で憎まれたこと
大切なものを取り上げられたこと
振り返ってみれば
こんなにたくさんの
私を取り巻く人々がいて
私になにかのアクションを投げ
私にいろんなことを考えさせ

私のてっぺんをへこませてくれた
あんなにも言いにくいことを
それが例え感情を交えた仕打ちであれ
本心からの憎しみであったにしろ
真剣に言い募ってくれた
振り返ってみればこそ
あの冷たい言葉が
私を激怒させ
私を踏みとどまらせ
あの嫌味あふれる仕打ちが
めぐりめぐって
私のことを他人の身に振り替えて
考えさせてくれることになった

時を経て今、それらを
私の心に伝えてくれようとしている
いや、ようよう私が気付きつつある
まるで縄目模様のありさまだ
本当に精巧に仕組まれたドラマだ
あんなに酷いことの一つ一つが

紫陽花

今年も門口に

凜と、紫陽花が咲いた
青、紫、赤、白

―移り気、高慢

美しいが冷たい

辛抱強い愛情

花言葉を見れば
いかにも、と思わせる

落ち着いた青い花弁は
分別を十二分に持った
淑女というところか

頬を赤らめた赤い花弁は
恋する乙女か

紫色の花弁はといえば

妖しい魅力を湛えた

傾城なのかもしれない

白色の花弁となると

哲学者の風貌を持ち

軽々には近付きがたい

花言葉はさすがだ

門口の紫陽花に見送られ

背筋をしゃんと伸ばし

今朝も一步を踏み出す

(付記)

花言葉―花言葉事典(w e b)を参照

光舞う

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞い下りる

辻辻から人が出てくる
辻辻から車が出てくる

新鮮で透き通った光が
屋根をすべり窓をすべり
水辺に佇む鷺の長い脚を
すべり

辻辻から子供が駆け出す
辻辻から母が手を振る

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞い走る

遠くから電車が滑り込む
構内に人があふれる

少し濁った川が

落ち着きを取り戻し

風を滑らせる

クマ蝉が一斉に鳴きたてる
後ずさりしたり
枝から枝に移ったり

厚い雲からこぼれ出た
朝の光が舞いおどる

五月の雨

鍼師に調子を尋ねられ

五月は朝日が強烈で

あまりの強烈な光の明るさに

ときならぬときに目覚めてしまうから

リズムが変になる

という類のことをいったことの意味に

後になって気付く

光ということばは

禁句だった筈だ

他意は全くなかったのだが

いつも間髪を入れずに戻ってくる

鍼師の返事に

微妙なためらいがあったことに

すぐには気付かなかった

多分これらに近いことを

多くの場面で言い

多くのことを

そのまま見過ごしているのに

違う

詫びを言っても

始まらないのかもしれないが

なんとも心苦しい

謝れば済むのだろうかと考えれば

そう単純な話でもない筈だ

そもそもが

相手を傷付けないように

という思い自体に

傲慢な思いが半分以上は隠されている

のではないだろうか

自分自身の中にあつて

思いやことばや態度は

慰めにもなる代わりに

思わぬ武器にもなってしまうことの

なんと多いことだろう

方向はこうだとか

こうすればいいのだろうかの

判定にしゃしゃり出ようとしたがる

目立ちたがり屋で気まぐれの

やじろべえで

あるのかもしれない

それにしても今日の雨

五月に入って何日目の雨だろう

強烈な朝日の洗礼を浴びることなく

ほの暗い中で目覚めたとき

やはり同じ早朝の四時だった

ということば

条件反射という類のこと

であるのかもしれないが

どんなに朝日が強烈であろうと

音のない静かな雨が降ってしようと

リズムを感じしているのは

クローバ

雨があがり
川面が涼やかになった
日を受けた水が
川底を透いて流れる

かすかに渡る風に吹かれ
絹色の水の肌が
川中にできた島に
とろとろと寄せる

青い島に白い靄がかかり
静かに寄せてくる水を
懐にやさしく呼び込んで
サラリとかわす

白い靄は白詰草

そう、群生するクローバだ
花言葉は約束
私を見て、ともある
あるいは復讐、だとも

絹色の水の肌に
なにを約束し
なにを復讐しようというのか
そんなに見てほしかった
ものはいったいなに

いつか皇居の堀端にも
なにかの意志を持つものごとく
空の色に繋がりに
煙り、群生していた

いま雨に洗われたクローバは
静かに寄せてくる水を懐に
やさしく呼び込んで
水に流していく

(付記)

花言葉 | 花言葉事典 (web) を参照

約束
私を見て
復讐

クローバはこれらの
全てを遂げるため
川中にできた島や堀端に
白くひそやかな強さで咲き誇り

とろとろと寄せる水に
茫洋と思いをいたし
はるかな胸を開き
火照りから冷めやらない
身を浸すのかもしれない

花の宴

花が咲いた

公園に

遊歩道に

キャンパスに

山の中腹に

海沿いの道に

鮮やかに白い

花が咲いた

幼稚園児が

新社会人が

老人が

病室の窓から

病み呆けた
男や女たちが

黄昏時に

アベックたちが

段ボールの隙間から

髭面の男が

花を見上げ

花を見つめ

花吹雪を浴びる

一年に一度の

晴れがましい花の宴に

おそらく誰もが

晴れ着に身を包み

おそらく誰もが

心の晴れ着に身を包み

花の喜びの席に座り

花の歌を聞きたいのだ

風は冷たく

理不尽にも風にさらされ

雨にうたれ

雨に穿たれ

花も男たちも

花も女たちも

うち叩かれたりすることは

先刻承知のうえだが

一年に一度の

晴れがましい花の宴に

おそらく誰もが

精一杯の晴れ着に身を包み
花の喜びの席に連なり

花吹雪の歌を

光焔めく歌を

腹の底から歌いたいのだ

春も来い

春よ来いと歌う
春はのどかで叙情的で
その兆しが見え始めると
万物は歌い出し
枯れ木もチューリップも
あめんぼうも
足踏みして待ち望んだものだ

今は
春も夏も秋も冬も
境があわあわとして
冬の領分だと思われる時期に
桜が咲いたり
コスモスが咲いたり
蛙が歌ったりする

季節なんて
もともとそんなものかも
知れないが
暖かいと無性に嬉しく
なってしまうから
現金なものだ

温暖化だの
極地の氷が溶け出したのだと
理屈ではわかっているのに
暖かそうな兆しが見えてくると
頬が弛んでしまうのだから
しまらない
霞がたなびき
木蓮が咲き

雪柳が咲き乱れ
モミジや梅や桜の芽が
一斉に芽吹こうとタツタラ
パッパラとラッパを鳴らし
地中の水分をギュウツと
吸い寄せるための準備に
余念がない

ひねくれた詩人氣取りにまかせ
今日は今日
今は今
春よ来い
春も来い
やっぱり暖かいうらうらした日向よ
早く来い

もうすぐ
入学式が行われ
学校は子供たちの群れで
溢れかえる
九十度に腰を折り曲げた老人が
日向でほんわり欠伸をする
こうなるとどうにも
頬が弛んでしまうのだから
しかたがない
暖かいことで
頭を抱え込むなんて

水仙

うぬぼれ、自己愛、エゴイズム
神秘、尊重
私のもとへ帰って、愛に応えて
尊敬、心づかい

花言葉だという
庭の隅に健気に咲いている水仙の
香しい、慎ましい香りが
そういうメッセージを醸すのだろうか

寒い朝
ひっそりと白い花卉を開き
人々の足元に蹲るかに
咲いている

清楚で、ひかえめな花卉の様は

自己愛やエゴイズムという言葉に
一脈通じるものがある

踏まれ
気付かれず
生娘が放つ清々しい香りに
振り向かれないときであろうと
気丈にすつくと立つ

実は、愛に乾いているのかもしれない
憂いをいっばいに溜め込んでいるのかも
しれない

しかし、なりふり構わず
泣いたり笑ったりということをしな
かといつて、ただ

耐えているだけというのでもない

やっばり
自己愛に裏打ちされた
神秘の強い力を秘めた
涼やかな仙境に
凜と咲く花なのだろう

(付記)

花言葉―花言葉事典 (web) を参照

風翻る

よい季節です
侘助の新芽は淡く
葉に小さなギザギザがありますが
新芽を迎える先輩の葉は
つるりと光っています

この先輩の葉たちが
白い小ぶりの可愛い花を
幾つも幾つもと
咲かせてくれました

よい季節です
淡い緑の新芽は
折りからの日の光に透き通りそうに輝き
初めて見るこの世の景色に
いく分驚いた表情を

見せています

先輩の葉たちが
なにも心配いらな
君たちの力で
白い小ぶりの
花を咲かせるまで
きつと協力するから
と囁きかけます

よい季節です
うらうらと射す日に
とても恥ずかしそうに
新芽が顔を火照らせています
とても嬉しそうに
涼し気な風を受けています

呪文

書けない書ける書けない書ける
書ける書けない書ける書けない
呪文が湧いてくる

いったい
ことばはどこからくるのか
心の隙間に
ポトリと落ちてくることば
たまたまそれを拾うときもある

街中や職場で無数のことばが行き交い
無数の思いが乱れる
その中にこぼれていることば
たまたまそれを拾うときもある

好きになったり僻んでみたり
憎まれ口をたたいてみたり
その間にこびりついていることば
たまたまそれを拾うときもある

かんかんがくがくの議論をしたり
殴り合いの様相をていしたり
その後捨てられたことば
たまたまそれを拾うときもある

いったい
ことばはどこからくるのか
書ける書けない書ける書けない
書けない書ける書けない書ける
呪文が湧きあがる

心を透かし見れば

本当の気持ちとはと考えてハタと行き詰まった
本当の気持ちなどあるのだろうか

笑顔を浮かべているときの気持ち
渋面をつくっているときの気持ち
冷たい視線を投げているときの気持ち
施されているときの気持ち
施しているつもりの中の気持ち

こう書き連ねていたらとてもきりが無い
例えば笑顔を浮かべているとき
涙が出るほど感激しているのかもしれない
追従笑いを浮かべているだけなのかもしれない
相手の口説がただ早く終わることだけを
願っているのかもしれない
本気で殺したいほど憎らしい思いが

せせら笑わせているのかもしれない

本当の気持ちなど
当の本人でさえわからないことかもしれない
ケースによって
相手の出方によって
時間の経過によって
それはめまぐるしく変わっていく
ことになるのかもしれないから
心を透かし見るなんて
こんな難しいことはないだろう
しかしいきなり爆弾が降ってきたとしたら
嬉しいことだろうか
いきなり仕事を敵になったとしたら
喜ばしいことだろうか

自分

多くの中の自分と対面するが
いったい自分は

確実な
自分でなければならぬ

暗示のていでいて
完全なる
解答でなければならぬ
身近なものさまでいて
はるかなもので
なくてはならない
はるかなものの距離にいて
身近なもので
なくてはならない

多くの中の自分

多くの中に包まれ

多くの中にちりばめられた
多くの自分の中の自分

その自分が的確に
自分でなくてはならない
その自分が常に
自分でなくてはならない
その自分が常に
はるかなものに
通じていなければならぬ

予感

相撲や野球でどちらが勝つか
たいてい予感が当たる

それなら

取り組み前や

試合前に

予想しろといわれる

しかし予感が走るのは

制限時間いっぱいあたりの

両力士の背中への汗の光り具合や

一球の判定によって

急に空気が重苦しく傾ぎだす

そんな加減で

なんとなく感じる

後説だろうともいわれる
誰だってそうなんだ
ともいわれる

でもやっぱり

これは予感なのだと思う

いや本能が次の瞬間のことを

ほんの一条

垣間見ただけなのかもしれない

もちろん

自分だけの現象ではないだろう

誰にでもある筈だ

この道行きになにが待っているのか

次の瞬間になにが来るのか

それを感じなくては誰も

クリスマス

クリスマスも間近だというのに
自爆テロだの
酔っぱらい運転だの
無差別殺傷だのというニュースが
頻繁に流される

街はクリスマスソングで浮き立ち
大売り出しの看板が並び
人はコマネズミよろしく走り回る

夜を徹しての
仕事に疲れているというのに
メールやファックスで
新たな仕事が増えてくる

あるいは、仕事をもぎ取られ

突然、寒空の下に放り出される
妻も子供もいるのに
いったい、どうしろというのだ

おぼっちゃまばかりの政治家が
理屈だけは通りそうな漫談を
連綿とやらかす

バラエティーばかりが映る
テレビしか他にはないのだろうか
大型スクリーンの前で

人はとうに諦め
ねじけた笑いを浮かべるばかりだ

クリスマスも間近だというのに
押し寄せてくる波に

人はようよう首まで浸かっているが

やがて、その力も失せ
濁流に呑まれていく

なにかが変だ

変ということばは今年を象徴する
ことばだというが

実に変なことだらけだ
やはり、なにかがおかしい

変なことが普通だという

変なことに慣れてしまうと
間隙を縫って

財をやたら積み上げることや
変なことで目立とうとすることに

やっきになったり
うつつを抜かす羽目に

陥ったりする

命という命が

紙屑みたいに引きちぎられてしまっ

クリスマスも間近だというのに

人は、ただの作り笑いが習い性になり
隣がなにをしているのか

なにをしようとしているのか
見ようともしない

見ても、見えないのかもしれない

ジャズシンガー

すっかり酩酊したジャズシンガーは
みずすましの軽さで
車と車の間を巧みにすり抜け
交差点を渡っていく

三ナンバーの車も
バスもトラックも警笛を鳴らし
ジャズシンガーの袖や裾を
掠めてすり抜け
オメエなんかボンネットに
乗っけるのはゴメンダヨ
と二言、三言卑猥なことばで
怒鳴り付け
車輪を軋らせ
ブレーキもかけずに過ぎてゆく

すっかり酩酊したジャズシンガーは
肥え太ったやつらめ
どうだい度胸はないのかい
ボンと十メートルぐらい
跳ね飛ばしてみる勇氣なぞ
どいつもこいつも持ち合わせてないのかい
どうだい
この真つ赤な血が騒いでるんだ
ニューオリンズ仕込みの
正真正銘のお兄さんの血いだ
欲しくばくれてやろうじやないか

すっかり酩酊したジャズシンガーは
交差点の真ん中に仰向けに寝ころんだ
パトカーや

救急車や長距離トラックが
警笛を鳴らし
マイクを鳴らし
ジャズシンガーの耳元や指先を
すり抜けて止まり
オメエなんかの血で汚されて
タマルカヨ
サツサトドキヤガレ
と怒鳴り付け
ピストルをもった警察官が
下りてきた

すっかり酩酊したジャズシンガーは
来たなウジ虫ども望むところだ
撃て、撃ちやがれ
心の臓を撃ち抜きやがれ
土手っ腹に鉛の玉を
ぶち込みやがれ
さあやってみろ
と西部劇の役者みたいにみえをきる

すっかり酩酊したジャズシンガーは
ちきしやうクソツタレ
肥え太ったやつらめ
俺はちっとも
酔ってなんかいないぞ
俺はちっとも
狂ってなんかいないぞ
俺はちっとも
怖くなんかないんだぞと
三ナンバーの車も
バスもトラックも
パトカーや
救急車や長距離トラックも
誰一人いなくなった交差点で
ジミーヘンドリックス気取りで
サイケデリックによるめきながら
蛇行しながら叫んでいる

開かずの踏切

右からの電車が横切り
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
赤いランドセルが見える
少女は楽し気に頬をふくらませ
なにやら縦笛に似たものを
誇らし気に握っている

左からの電車がのろのろと出る
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
青年が見える
彼は新聞のページをめくりかけたまま
どこか気の弱そうな
神経質そうな眉を寄せ
警報機をじっと見上げる

右からの電車が重い音で横切り
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
母親が見える
彼女は乳母車の子に笑みを投げ
もう少しだからね
と口をすぼめる

左からの電車が矢となって横切り
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
腰を二つに折った老人が見える
老人の顔は地面に向けられているから
しかとは見えないが
ナンマイダという呪文を
何十回と唱えているのが知れる

どこへいくのか

右からの電車がガタガタと横切り
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
少年が見える
少年はいい加減にしないかよう
というサインを
こちら側の仲間を送り
三塁コーチが走者を進めるときのしぐさで
両手をグルグル回した
左からの電車が当然という顔で横切り
遮断機の向こうに
踏切を渡ろうとする
自転車の男が見える
男はいつなんどきでも
目の前の扉が開かれたら
猛獣よろしくダッシュするのだと
ペダルを十回も二十回も踏みしめ
ハンドルを握る手は

じっとり汗ばんでいる

右からの電車が警笛を鳴らして横切り
左からの電車が急停車をしたかと思うと
何事もなかったかのごとくに横切った

遮断機の向こうから
踏切を渡ろうとする
少女や、青年や、母親や、老人や、
少年や、男や、自動車や、サラリーマンたちは
だんだんと俯き加減になり
わずか五メートルの踏切を渡るために
カン、カン、カン、カン、カンと
いつまでも鳴り止まない警報機の音を
ドン、ドン、ドン、ドン、ドンと
足を踏み鳴らしながら
呆けた目を閉じ聞いている

泣きたいときに

泣きたい夜もある
そんなときは
泣けばいい
なに憚ることなく
素直に泣けばいい

泣きたい旅もある
道程の辛さに
待ち受けている苦しさに
足が動こうとしない

泣きたい逢瀬もある
肩を抱き
ものも言わず
じっと目と目を合わせる

泣きたい歌もある
喉元まであふれ出てくる
熱く苦いものを
ウイスキーの熱で
思いつきり流したい

おおよそ、いつのときも
うまくいかない話や
うまくいかない仕事や
うまくいかない恋など
ばかりで

泣くしかないときは
泣けばいい
泣いて、泣いて
泣くだけ泣けば

思わず、笑えてきたりする

泣きたい夜もある
泣きたい恋もある
そんなときは
なに憚ることなく
泣きたいだけ
泣けばいい

少女

やや傾ぎ加減の立ち姿
なにか遠い
はるかな思いに導いてくれる
淡い光の中の少女

少女が歩を進めるたびに
小刻みに光が揺れる
小刻みに時がたたらを踏む

その瞳の澄明さ
その眼差しのしなやかさ
その唇のやわらかさ

少女が歩を進めるたびに
小刻みに光が揺れ
あつと声にならない声が

唇をもれる

遠くはるかなる者が
存在するとしたら

いかにして
こんなに悲しい過ちを
しでかすことができるのか

やや傾ぎ加減の立ち姿
なにか遠い
はるかな思いに導いてくれる
淡い光の中の少女

少女が歩を進めるたびに
小刻みに光が揺れ

小さく左右に傾いだ声が
唇をもれる

幾劫もの時空を
束ねるのであろう
遠くはるかなる者が
存在するとしたら

いかにして
こんなに冷たい仕打ちを
しでかすことができるのか

淡い光の中の少女
どこまでも深く深く透け
どこまでも高く高く
翔けりいく

ほのかな揺らぎにも似た
青い光の中の少女よ

母の記憶

八月九日

あの瞬間のぶざまな戦慄を
川棚というところを知った

空があまりに乾いていたから

大村湾を渡ってくる

得体のしれないどよめきが

赤々と喉元を焦がし

身内をざわざわと

締め上げてくる冷たいものが

胸のあたりに

激しく渦巻き

滴り落ちるのは

汗だったのか

にわかには湧き起こってきた雲から
落ちてくる滴だったのか

赤々と燃え上がるのは

この世の光景ではない

彼岸の向こうに

広がるという

鮮烈な紅葉のうち重なり
であったのか

奇妙に澄んだ

清冽な空の広がり

森閑とした

空気を透いた

天上のせせらぎにも似た
軽やかな音曲にのり

どこへいくのか

得体の知れないどよめきが
目を耳を肌を喉元を
はたはたと
わらわらと打った

それはものたちが

一時の間に

天に競いのぼるといふ

ひしめきの音だったのだろうか

あまりの突然の

ことに

天上の側もがうるたえ騒ぐ

靴音の乱れであったのだろうか

ものたち

それは子を持つ母であったり

日々の糧を得るために働く

車引きであったり

戦地に赴いた恋人の

帰りを待つ少女であったり

産まれ落ちたばかりの

乳飲み子であったりする

ものたち

それは毎日数千人が

乗り降りする駅のホームであったり

祈りの絶えることのない

教会の鐘の音であったり

校門への坂道に積まれた

形のよい石ころであったりする

空があまりに乾いていたから

まるで森閑とした

空気を透いた

天上のせせらぎにも似た

涼しくて軽やかな音曲にのった

得体の知れないどよめきが

大村湾を渡り
目を耳を肌を喉元をはたはたと
わらわらと打った

母は
得体のしれないどよめきに
喉元を赤々と焦がし

身内にさわさわと
込み上げてくる
冷たい胸の鼓動に身をまかせ

めくるめくままに
ことばを失い
晴れがましさを感しながら

眼前に揺れ立つ
逆さまの海軍工廠を
じつと
見上げていた

「月とつばめ」ほかに寄す

〈ツバメの声と草いきれ〉
〈あといくつこの月を背に〉
〈ある日わたしはなかったものに〉

詩集をいただきました
喉の奥から絶え絶えに紡ぎ出される
ゆらゆらとしたことばは
私の心をこうも切なくします

息をするだに苦しいのでしょうか
ことばを紡ぐことが今
それほどに気怠いのでしょうか

〈田圃の傍の白い花を見つめながら〉
〈生きている意味をも失う瞬間がある〉

白い詩集の可愛らしい装丁のなかに
驚くほどの余白がぎつしり埋め込まれています

〈ツグミは何でか分からない〉
〈わたしも何でか分からない〉
痛々しさを覚えるのは
私の単なる思い過こしでしょうか

私の胸の奥の声がわなないています
この錆びた時間が早足で過ぎ去るのを
ひたすら待っています
じつと立ち止まったまま
私は決然とひたすら待っています

〔注〕「月とつばめ」ほか かつきあみ 作詩

万華鏡

花卉と花卉がぶつかり合い、
定まる

その無間の広がりへの
夢

その鮮やかな切れ味
その得も言われぬ早業

花卉と花卉がくつつき、離れ、
また定まる

その造形の妙
その光り加減の玲

花卉と花卉が飛んで、散って、
定まる

その息つかせぬ間